

目標に対する期待と生活感情・達成傾向の関連性

杉山 成

現在の行動や心理的適応に影響力を持つ「動機づけ的未来展望 (motivational future time perspective)」の構造と機能に関して、杉山(1995, 1996)は、期待理論を援用して検討し、その機能が未来認知における3つの要因に基くことを示唆した。すなわち、未来に対する誘意性を反映する「個人的未来に対する感情的態度」、個人的目標と未来の成果との結びつきを示す「個人的目標の道具性期待」、そして目標の実現可能性の評価である「個人的目標の遂行期待」という3種の認知要因の相互作用によって未来展望の行動調整効果が機能するというモデルである。

杉山(1998)では、そのモデルに基き、個人の目標に対する意識の分析を行い、目標に対する期待という認知要因が、その未来の成功への道具性期待と、それ自体の遂行期待という2つの因子として抽出されることを見いだした。そして、それらを目標期待尺度として構成し、イベントテストや自我同一性尺度との関連性の検討を通して信頼性および妥当性を確認した。また、その後、YG性格検査との関連やストレス対処方略の選択との関連を調査し、モデルの妥当性を検証してきた(杉山, 2002)。

本研究においては、この目標期待尺度を用いて、さらに青年の未来展望が生活感情および達成傾向の側面に及ぼす影響性を検討する。そして、これまでの結果と合わせ、未来展望の行動調整効果についての全体的な考察を行うこととする。

研究1 目標に対する期待と生活感情の関連の検討

生きがい感や健康的な自我同一性といった心理的適応の様相は、日常的に

は充実感やしらけ、孤独感等の生活感情 (sentiment) に反映されると考えられている。西平 (1979) の心情モデルに基づいて青年期の充実感の因子分析的研究を行った大野 (1984) によれば、未来に対する期待や不安はこうした充実感を規定する重要な次元を形成する。落合 (1980) もまた、青年期の孤独感を構成する次元の一つとして、時間的展望の次元を想定している。このように、青年期の生活感情のあり方は、その個人の持つ未来展望のあり方と深く関わる事が推測される。

そこで研究1では、個人的目標に対する遂行期待と道具性期待と、人生に対する積極的な態度や生活感情の様相との関連性を検討し、青年の生活空間における未来展望の持つ意味を明らかにすることを試みる。

方 法

被験者 大学生 155 名 (男性 85 名, 女性 69 名, 不明 1 名)。

質問紙の構成 未来展望の尺度としては、目標期待尺度(目標遂行期待尺度, 目標道具性期待尺度)の 17 項目を 6 件法, および未来に対する態度を測定する 25 項目を 5 件法によって実施した。各尺度のとりうる得点の範囲は、目標遂行期待尺度で 7-42 点, 目標道具性期待尺度で 10-60 点, 未来に対する態度尺度で 25-125 点となる。

人生に対する積極的態度を測定する尺度には、板津 (1992) の「人生に対する態度」尺度を 6 件法によって実施した。一方、生活感情に関しては、自由記述によって青年期の生活感情を検討した落合 (1985) を参考に、その結果において記述頻度の高い感情表現を選択した。そして、それらの感情を最近どのくらい感じるかについて、「いつも感じている」から「全く感じない」までの 5 件法によって評定させた。なお、選択されたのは次の 20 の感情である。①充実感, ②不安な感じ, ③疲労感, ④感動や感激, ⑤幸福感, ⑥ゆううつな感じ, ⑦よこび, ⑧解放感, ⑨嫉妬, ⑩たいくつな感じ, ⑪あきらめ, ⑫空虚(むなしさ), ⑬自分は劣っているという劣等感, ⑭自分はひとり

だという孤独感, ⑮どうしようもない無気力感, ⑯自分が嫌だという自己嫌悪感, ⑰疎外感(のけものにされた感じ), ⑱いらだたしさ, ⑲こわいという恐怖感, ⑳やることが多くあるのに, はかどらないという「あせり」。

調査手続き 心理学の授業中に質問紙を配布し, 回答させた。

結果と考察

人生に対する積極的態度に関して主因子法によって因子の抽出を行ったところ, 一次元性が強かった(第1因子の固有値が11.3, 第2因子以降は, 1.50以下)ので, 第1因子に寄与の低い3項目以外の25項目を測度として採用した。

生活感情の20項目についても同様に主因子法によって因子の抽出を行った。その結果, 因子の固有値が第1因子では, 7.40, 第2因子では2.20であったのに対し, 第3因子以降は1.50以下のものであり, 第3因子以降の落ち込みが大きかったので, 2因子構造を仮定し, 因子の数を指定して再度因子分析を行い, バリマックス回転を施した。その結果がTABLE.1である。第1因子は自己嫌悪感, 空虚感, 劣等感等の感情に寄与が高い因子であり「自己に関する閉塞感」, 一方, 第2因子は幸福感, よろこびや充実感に寄与が高く, 「現在の生活の充実感」として解釈することができる。これらの因子分析の結果に基づいて, 人生に対する態度に関しては25項目の尺度, 生活感情に関しては14項目と6項目から構成される下位尺度を構成した。よって, 各尺度得点のとりうる範囲はそれぞれ, 25-150点, 14-70点, 6-30点となる。各下位尺度の平均と標準偏差, α 係数はTABLE.2に示す通りであり, いずれも使用に足る内的整合性を示している。

そこで, 目標期待尺度と人生に対する積極的態度, および自己閉塞感, 生活の充実感との間の相関係数を算出した(TABLE.3)。その結果, すべての関連性が有意に至り, 遂行期待尺度, 道具性尺度ともに人生に対する積極的態度, 生活の充実感とは正の相関, 自己閉塞感とは負の相関が確認された。

TABLE 1 生活感情の因子分析（バリマックス回転後）

項 目	因 子		h ²
	I	II	
不安な感じ	.76		.62
疎外感（のけものにされた感じ）	.73		.56
自分はひとりだという孤独感	.71		.58
自分が嫌だという自己嫌悪感	.70		.63
自分は劣っているという劣等感	.66		.55
どうしようもない無気力感	.65	-.43	.62
あきらめ	.62		.50
空虚（むなしさ）	.61	-.49	.62
ゆううつな感じ	.61		.53
嫉妬	.57		.33
こわいという恐怖感	.55		.30
いらだたしさ	.54		.30
疲労感	.45		.21
やるが多くあるのに、はかどらないという 「あせり」	.39		.39
幸福感		.85	.72
よろこび		.78	.64
感動や感激		.71	.51
充実感		.66	.47
たいくつな感じ		-.63	.48
解放感		.31	.24
	7.40	2.20	

注) 因子負荷量は .30 以上を掲載した。

TABLE 2 各下位尺度の平均、標準偏差、および α 係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	α 係数
目標遂行期待尺度	24.55	5.15	.91
目標道具性期待尺度	39.42	9.80	.80
未来に対する態度	81.67	15.70	.92
人生に対する積極的態度	103.99	18.43	.94
自己閉塞感	38.59	8.85	.89
生活の充実感	17.49	3.80	.71

TABLE. 3 目標期待尺度と生活感情の相関

	目標期待尺度	
	遂行期待	道具性期待
人生に対する積極的態度	.49**	.50**
自己閉塞感	-.54**	-.35**
生活の充実感	.31*	.43**

注) + $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

TABLE. 4 には、目標期待の一方の尺度を統制して求めた目標期待尺度と生活感情の間の偏相関係数を示した。これによって目標期待の尺度間の違いを検討すると、自己閉塞感では遂行期待との関連が高く ($r = -.44$ $p < .01$)、一方、生活の充実感に関しては道具性期待との関連が高い傾向が認められる ($r = .28$ $p < .01$)。

TABLE. 4 目標期待尺度と生活感情の偏相関

	目標期待尺度	
	遂行期待	道具性期待
人生に対する積極的態度	.26**	.27**
自己閉塞感	-.44**	-.01
生活の充実感	.11	.28**

注 1) 目標期待の他方の尺度を統制して、目標期待の 2 尺度と生活感情の 3 尺度の偏相関係数を算出した。

注 2) + $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

TABLE. 5 未来に対する態度と生活感情の相関

	未来に対する態度
人生に対する積極的態度	.59**
自己閉塞感	-.57**
生活の充実感	.67**

注) + $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

つぎに、目標期待の2尺度のそれぞれの平均値に基づいて2分し、それぞれの高低の組み合わせによる4群を設定した。LL群は遂行期待(25点未満)、道具性期待(40点未満)共に低群に属する38名、LH群は遂行期待では低群、道具性期待では高群(40点以上)に属する11名、HL群は遂行期待では高群(25点以上)、道具性期待では低群に属する12名、HH群は遂行期待、道具性期待共に高群に属する38名で構成される。そして、人生に対する積極的態度、自己閉塞感、および生活の充実感を従属変数とした一元配置の分散分析、およびLSD法による多重比較(5%水準)を試みた。TABLE.6に4群におけるそれぞれの平均値と分散分析、および多重比較の結果を示す(表中の1, 2, 3, 4という数字はそれぞれLL群, HL群, LH群, HH群を示す)。その結果、いずれの従属変数に対しても4群の主効果が有意となった。そして、人生への積極性や生活感情において、遂行期待、道具性期待のいずれも低いLL群が最もネガティブな傾向を示し、遂行期待、道具性期待のどちらも高いHH群が最もポジティブな傾向を示していた。HL群やLH群の平均点はそれらの中間に位置していた。多重比較の結果では、人生に対する積極的態度、自己閉塞感ではLL群に比して、HL群、HH群が有意に適応的な方向を示し、生活充実感ではLL群に比してHH群の得点が高かった。

最後に、こうした目標に対する2つの交互作用、およびこれらの目標期待の影響性と未来に対する態度との交互作用を検討するために、5ステップによる階層的重回帰分析を行い、それぞれの説明変数の寄与の有意性を検定した。人生に対する積極的な態度、および自己閉塞感、生活の充実感のそれぞ

TABLE. 6 目標期待尺度による類型の生活感情の比較

	1. LL	2. LH	3. HL	4. HH	多重比較の結果	
人生に対する積極的態度	95.6(19.8)	104.3(15.2)	108.4(13.1)	110.7(16.5)	5.06**	1<3,4
自己閉塞感	42.8(9.0)	42.2(8.4)	32.1(6.4)	35.2(6.8)	9.42**	3,4<2,1
生活の充実感	17.2(4.0)	18.6(3.2)	18.1(2.4)	19.8(3.6)	3.35*	1<4

注) + $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

れを基準変数とし、道具性期待、遂行期待の順に説明変数を段階的に投入し、そしてその後に、それらの交互作用として、2尺度の得点の積(道具性期待×遂行期待)を投入した。さらに、未来に対する態度を投入し、最後に3つの説明変数の積(道具性期待×遂行期待×未来への態度)を3要因の交互作用として投入した。

その結果がTABLE.7, TABLE.8に示されている。道具性期待と遂行期待の交互作用は、いずれの基準変数においても5%以上の説明率の上昇をもたらし、有意であった。一方、道具性期待×遂行期待×未来に対する態度の3要因の交互作用は、生活の充実感のみにおいて有意な説明率の上昇をもたらしており、方向を検討すると、いずれもそれぞれの要因の高い個人が適応的な傾向(高い人生に対する積極的態度, 低い自己閉塞感, 高い生活充実感)を強く示すというものであった。

TABLE.7 人生に対する積極的態度における階層的重回帰分析の結果

		人生に対する積極的態度	
		R ² 累積	R ² 変化
目標道具性	(A)	.25	.25**
目標遂行期待	(B)	.31	.06*
(A)×(B)		.37	.06*
未来に対する態度	(C)	.43	.07*
(A)×(B)×(C)		.45	.02

注) + p<.10, * p<.05, ** p<.01

TABLE.8 生活感情における階層的重回帰分析の結果

		自己閉塞感		生活の充実感	
		R ² 累積	R ² 変化	R ² 累積	R ² 変化
目標道具性	(A)	.13	.13**	.18	.18**
目標遂行期待	(B)	.29	.16**	.20	.02
(A)×(B)		.34	.05*	.25	.06*
未来に対する態度	(C)	.40	.06*	.49	.24**
(A)×(B)×(C)		.41	.01	.55	.06*

注) + p<.10, * p<.05, ** p<.01

以上のように、本節においては目標期待尺度と人生に対する積極的態度、および自己閉塞感・生活充実感という生活感情の関連を検討した結果、目標に関する道具性期待、遂行期待の傾向の高い場合に現在の生活に対して積極的にとりくみ、自己閉塞感が低く、高い充実感を感じていることが確認された。さらに、生活充実感ではこれらの目標期待と未来に対する態度との交互作用もみられ、このことから、現在の生活に関する充実感が、これら3つの認知要因の組み合わせと関連を持つことが示唆された。

研究2 目標に対する期待と達成傾向の関連の検討

達成動機または達成傾向とは、「障害を克服し、卓越した基準を設定して、できるだけ独力で自己の力を発揮してその基準に到達しようとする（小川，1987）」動機や意欲である。こうした個人の達成傾向と時間的展望の関連は古くから注目され、現在の生活における課題や目標への高い意欲は、こうしたポジティブな未来展望に支えられていることが議論されてきた（e.g., Lewin, 1948）。

先述のモデルにおいても、目標に対する期待と未来に対する態度が現在に影響を及ぼす過程を動機づけ心理学における期待理論に基づいて考察し、それらの認知要因が現在とりうる活動のうち、未来につながる目標への動機づけを高めることで、結果的に適応状態を導くと考えている。そこで、研究2では達成傾向を対象とし、目標に対する期待との関連を検討する。

方 法

被験者 大学生 76 名（男性 41 名，女性 35 名）。

質問紙の構成 未来展望の尺度としては、目標期待尺度（目標遂行期待尺度、目標道具性期待尺度）の 17 項目を 6 件法、および未来に対する態度を測定する 25 項目を 5 件法によって実施した。各尺度のとりうる得点の範囲は、目標

遂行期待尺度で7-42点, 目標道具性期待尺度で10-60点, 未来に対する態度尺度で25-125点となる。

達成傾向の尺度としては, 水口(1994)による達成意欲調査を用いた。これは「頂点志向」「ねばり強さ」「進取性」「計画性」「挑戦性」という5つの下位尺度から構成される全25項目の尺度である。この尺度も5件法によって実施した。

調査手続き 心理学の授業中に質問紙を配布し, 回答させた。

結果と考察

本研究の被験者における目標期待尺度の平均と標準偏差は, 目標遂行期待尺度で26.52(SD 6.07), 目標道具性期待尺度では42.71(SD 10.20)となり, α 係数はそれぞれ $\alpha = .82$, $\alpha = .88$ であった。

達成意欲尺度に関しては主因子法による因子分析を行った。因子固有値が1.0以上の因子は第5因子までであり, 因子の数として5因子を指定して斜交オプティム回転を施したが, 解釈が困難な因子パターンであった。それゆえ, 2因子から6因子までの因子モデルを検討したところ, 3因子モデルにおいて解釈可能な因子パターンが得られたので, それを採用することとした。この3因子モデルの結果をTABLE.9に記す。なお, 因子分析を繰り返す過程において複数の因子に同時に高い負荷を持つ4項目を削除したため, 最終的な項目数は21項目となった。

各因子の内容を検討すると, まず, 第1因子には, 水口(1994)においては進取性, 計画性の下位尺度に分類されていた項目が集まっており, 目標や課題を自分で設定した計画に沿って周到的に遂行していこうとする傾向を意味するものと思われる。そこで「用意周到性」因子と名づけた。第2因子は, 水口の「粘り強さ」尺度に対応し, 課題が自己にとって困難なものであってもねばり強く努力を続けることによって遂行していくとする傾向を示す「努力持続性」因子と解釈される。第3因子は, 水口の「頂点志向」尺度と「挑

TABLE. 9 達成傾向の因子分析 (バリマックス回転後)

No.	項 目	因 子			h^2
		I	II	III	
66.	自分よりすぐれている人の意見は、大いに参考にしたい	.75			.60
67.	立派な業績のある人の話はすすんで聞きたい	.73			.61
55.	物事を始めるときは、きちんと準備を進めておきたい	.71			.54
56.	あることに興味を持ったら、なるべく長続きさせたい	.67			.58
46.	将来に対する見通しをきちんと立てておきたい	.67			.55
54.	将来にそなえて自分の腕をみがいておきたい	.64			.67
53.	やりかけたことは、とにかく一生懸命やりたい	.59			.51
52.	いろいろな経験を積んで将来にそなえたい	.59			.49
48.	今日できることは、今日のうちに片づけておきたい	.58	.49		.61
47.	かなり先までの努力目標を立てておきたい	.57			.59
59.	しなければならないことは、必ずやりとげたい		.80		.68
63.	人から頼まれたことは、必ずその期限までにやり終えたい		.77		.65
64.	どんなことでも、やり始めたことは最後までやり通したい	.43	.62		.68
58.	パズルや問題を解くときは、自分の力で正解が出せるまで頑張りたい		.56	.41	.54
68.	物事を仕上げるためには、夜おそくまでも頑張りたい		.41		.44
65.	どうせやるのなら、なんでも一番を目指したい			.55	.63
61.	なんでも仲間には負けたくない			.52	.62
70.	特別な技能が必要とされていることをやってみたい			.78	.67
51.	将来、職業や専門の分野で第一人者になりたい			.68	.52
57.	他人にはめったにできないことをやってみたい			.68	.54
69.	むずかしい問題には、何度でも挑戦してみたい			.41	.43
		8.02	2.22	1.92	

注) 因子負荷量は .40 以上を掲載した。

TABLE. 10 各下位尺度の平均，標準偏差，および α 係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	α 係数
目標遂行期待尺度	24.32	5.69	.84
目標道具性期待尺度	38.85	9.78	.92
未来に対する態度	80.58	15.46	.94
達成意欲性	94.16	13.21	.91
用意周到性	46.69	6.71	.88
努力持続性	23.12	3.73	.80
挑戦志向性	24.35	5.02	.80

戦性」尺度に属していた項目で構成されているので、自己に対して高い基準を設定し、それに挑もうとする「挑戦志向性」因子と解釈した。因子分析の結果に基づいて、該当する項目の得点の合計を求めることによって下位尺度を構成し、また全 21 項目の「達成意欲」尺度を構成した。よって、各尺度得点のとりうる範囲は、用意周到性尺度で 10-50 点、努力持続性尺度で 5-25 点、挑戦志向性得点で 6-30 点、そして達成意欲尺度で 21-105 点となる。各尺度の平均、標準偏差、 α 係数は TABLE. 10 に示す通りであり、いずれも十分な内的整合性を示している。

そこで、目標期待尺度と用意周到性、努力持続性、挑戦志向性の各下位尺度、および達成意欲の合計得点との間の相関係数を算出した (TABLE. 11)。その結果、道具性期待は 4 つの尺度すべてと有意な高い関連があり、一方、遂行期待尺度は努力持続性、および達成意欲全体尺度との関連のみが有意で

TABLE. 11 目標期待尺度と達成傾向尺度の相関

	目標期待尺度	
	遂行期待	道具性期待
用意周到性	.22	.32*
努力持続性	.28*	.43**
挑戦志向性	.21	.38**
達成意欲性	.27*	.43**

注) + $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

あった。目標期待の一方を統制した偏相関係数 (TABLE. 12) においても、道具性期待は達成意欲の各側面と有意な関連を示していたが、遂行期待尺度においては、いずれの下位尺度および達成意欲全体尺度との関連も有意ではなかった。

そして、目標期待の2尺度のそれぞれの平均値の高低に基づく4群 (LL群; 遂行期待が低群 <25点未満>, 道具性期待が低群 <40点未満> の25名, LH群; 遂行期待では低群, 道具性期待では高群 <40点以上> に属する13名, HL群; 遂行期待では高群 <25点以上>, 道具性期待では低群に属する7名, HH群は遂行期待, 道具性期待共に高群に属する30名で構成) におけるそれぞれの達成意欲の得点を算出し、それらを従属変数とした一元配置の分散分析を試みた (TABLE. 14)。その結果、いずれの従属変数に対しても4群の主効果が有意となった。そこでLSD法による多重比較 (5%水準) を行つたと

TABLE. 12 目標期待尺度と達成傾向尺度の偏相関

	目標期待尺度	
	遂行期待	道具性期待
用意周到性	.02	.23*
努力持続性	.01	.35**
挑戦志向性	-.03	.32**
達成意欲性	.01	.34**

注1) 目標期待の他方の尺度を統制して、目標期待の2尺度と達成傾向の4尺度の偏相関係数を算出した。

注2) + $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

TABLE. 13 未来に対する態度と達成傾向の相関

	未来に対する態度
用意周到性	.24
努力持続性	.15
挑戦志向性	.34*
達成意欲性	.29*

注) + $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

TABLE. 14 目標期待の尺度による類型の達成傾向の比較

	1. LL	2. LH	3. HL	4. HH	多重比較の結果
用意周到性	45.2(6.8)	47.4(7.0)	42.5(7.2)	49.0(5.7)	2.73* 3,1<4
努力持続性	21.4(3.5)	25.4(3.0)	20.1(2.7)	24.8(3.0)	9.29** 3,1<4,2
挑戦志向性	22.4(4.5)	27.1(4.5)	20.8(3.1)	26.2(4.9)	5.81** 3,1<4,2
達成意欲性	89.0(12.2)	100.0(11.5)	83.5(10.9)	100.3(11.7)	6.91** 3,1<2,4

注) + $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

ころ、用意周到性に関しては、LL 群や HL 群に比して HH 群が有意に高い得点傾向を示し、努力持続性、挑戦志向性に関しては LL 群や HL 群に比して HH 群や HL 群の平均値が高かった。達成意欲の全体尺度では、HH 群の平均値が最も高く、多重比較の結果では、HH 群と HL 群の平均値が LL 群、LH 群に比して有意に高いものであった。

そして、5ステップによる階層的重回帰分析を行い、それぞれの説明変数の寄与の有意性を検定したところ (TABLE. 15, TABLE. 16)、達成意欲の4尺度すべてにおいて、道具性期待×遂行期待の交互作用が有意となり、目標に対する道具性期待と遂行期待が組み合わされた場合に、用意周到性、努力持続性、挑戦志向性というそれぞれの達成意欲の側面が強く示されることが確認された。

さらに、用意周到性に関しては、道具性期待×遂行期待の他に道具性期待×遂行期待×未来に対する態度の3要因の交互作用もまた有意であった。この

TABLE. 15 達成傾向における階層的重回帰分析の結果(1)

		達成傾向	
		R ² 累積	R ² 変化
目標道具性	(A)	.18	.18**
目標遂行期待	(B)	.19	.01
(A)×(B)		.25	.06*
未来に対する態度	(C)	.27	.02
(A)×(B)×(C)		.28	.01

注) + $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

TABLE. 16 達成傾向における階層的重回帰分析の結果(2)

		用意周到性		努力持続性		挑戦志向性	
		R ² 累積	R ² 変化	R ² 累積	R ² 変化	R ² 累積	R ² 変化
目標道具性	(A)	.10	.10**	.19	.19**	.15	.15**
目標遂行期待	(B)	.13	.03	.19	.00	.15	.00
(A)×(B)		.18	.06*	.23	.04*	.15	.00
未来に対する態度	(C)	.22	.04	.23	.00	.19	.04*
(A)×(B)×(C)		.28	.06*	.26	.03	.21	.03

注) + p<.10, * p<.05, ** p<.01

ことから、達成意欲のなかでも、目標に向けて情報を収集したり、十分な準備をしておこうとする用意周到性という側面が、未来展望に纏わる認知要因の結びつきに深い関わりをもつことが示唆された。

全体的考察

動機づけの未来展望の行動調整効果について、目標に対する期待と現在の感情や適応状態との関連性を実証的に検討した。杉山(1998)では、YG性格検査を適応の指標として検討し、目標に対する道具性期待と遂行期待の両方の得点の高い個人の各種の適応性が高いことが確認された。また、目標達成に纏わるストレスへの対処方略を対象とした杉山(2002)では、目標に対する道具性期待と、ストレスへの消極的対処(ストレスに対して積極的に働きかけず、逃避、回避やあきらめによって対処しようとする傾向)との間にネガティブな関連が見いだされている。

本稿においては、研究1において、人生に対する態度や生活感情との関連を検討し、目標に関する道具性期待、遂行期待の傾向の高い場合には、現在の生活に対して積極的にとり組み、自己閉塞感が低く、高い充実感を感じていることが確認され、研究2では、達成意欲を構成する次元のうち、特に目標や課題を自分で設定した計画に沿って周到的に遂行していこうとする「用意周到性」という側面が、この目標期待と関連の深いことが確認された。こ

これらの関連性は、すべて理論的に推測された方向と一致しており、現在のモラルや適応が個人的目標と未来の成果との道具的結びつきと目標の達成への期待という期待要因によって支えられていることを示すものといえる。

Bandura, A. による自己効力感理論 (self-efficacy theory) では、行動の先行要因としての期待として、ある行動がどんな結果を引き起こすかという結果期待と、適切な行動をうまくとれるかどうかという効力期待をとらえ、そして、この2つの期待は異なる心理的効果をもたらすとして、両者の相互作用を仮定している (Bandura, 1985)。すなわち、FIGURE. 1 に示されているように、両期待が共に高い場合、自信に満ちた能動的な行為が促進されるのであるが、結果期待が高いにも関わらず効力期待が低い場合には、個人に劣等感や自尊心の低下をもたらす。逆に効力期待が高いにも関わらず結果期待が低い場合には、不平や不満の感情を生む。さらに両期待ともに低い場合には、個人は成果の獲得を断念し、無気力や抑うつ状態に陥るとされる。

この概念を個人的目標達成へ向けての期待という枠組みで捉えると、本研究における遂行期待と道具性期待と近接した概念となるであろう。そして、これまでの研究で得られた結果においても、目標に対する道具性期待と遂行期待の両方の得点の高い HH 群の個人 (FIGURE. 1 においては効力期待、結

		結 果 期 待	
		(-)	(+)
効 力 期 待	(+)	社会的活動をする 挑戦して、抗議する・説得する 不平・不満をいう 生活環境を変える	自信に満ちた適切な行動をする 積極的に行動する
	(-)	無気力・無感動・無関心になる あきらめる 抑うつ状態になる	失望・落胆する 自己卑下する 劣等感に陥る

FIGURE. 1 効力期待と結果期待の高低の組み合わせが感情、行動に及ぼす影響 (Bandura, 1985)

果期待の共に高い領域に対応する)のモラルや心理的適応の程度は高いものであった。一方、自己の目標と将来との結びつきを感じておらず、さらに目標を達成し得るという期待も低いLL群(FIGURE.1においては効力期待、結果期待の共に低い領域に対応する)は、他の3群に位置する個人に比して高い抑うつ性や低い自己評価を示し、また生活におけるモラルも低いものであった。このようにこれまでの研究によって示された現在との関連性は、自己効力感理論における効力期待と結果期待の枠組みと一致するものであった。

一方、VroomのEIV理論やそれに基づいたVan Calster, Lens, Nuttin(1987), Lens(1986)の研究からは、未来の目標群の誘意性を反映する「未来に対する態度」の様相によって目標期待の影響性が異なることが推測された。そこで、階層的重回帰分析を実施し、目標道具性期待×目標遂行期待×未来に対する態度の交互作用を検討したところ、研究1における生活充実感、研究2における達成意欲の用意周到性、および、杉山(1998)で検討したYG性格検査における劣等感の強さ、および抑うつ性という各変数に対して、その交互作用が有意な影響性を示していた。すなわち、これらの適応要因の程度は、目標に対する道具性期待、遂行期待、そして未来に対する態度という3つの認知要因の主効果や交互作用の影響を受けていると考えられる。

これらの結果から、目標に対する道具性期待、遂行期待、未来に対する態度と現在の適応との関連が次のように考察される。まず、目標に関する道具性期待と遂行期待が満たされ、さらに自己の未来に対してポジティブな態度を抱いているときには、個人は未来の目標の達成を志向し、現在とりうる行動のうち未来の成功につながる行動への動機づけが選択的に動機づけられるというように、行動は目標志向的に調整される。この過程においては、結果的に利他的・衝動的な活動の相対的な割合が減少することが推測される。一方、こうした未来展望に纏わる認知的要因が満たされないときには、動機づけの低下を通じて、不適応状態を導くであろう。この状態においては、目標の達成は実現性を持つことがなく、また未来の目標に高い価値を感じること

がないため、行動や思考が目標志向的な性質を持たない。そして、こうした未来の成果獲得に関する期待の低さ、すなわち統制不可能性の信念は、習得性無力感理論 (Seligman, 1975) や原因帰属理論 (Weiner, 1977), 絶望感理論 (Abramson, Metalsky, & Alloy, 1988) で既に論じられている如く、結果的に個人に劣等感や抑うつ感情を経験させることが推測される。

目標に対する認知が個人のパフォーマンスに及ぼす影響は、教育や産業場面での動機づけと関わることを示されており、それゆえ、近年ではそれを応用するための試みも徐々になされ始めている。例えば、Dweck (1986) は、無気力児童に目標の内容や基準の設定に問題点があることを指摘し、彼らに対して目標変容の手続きによる心理的介入を用いることを提唱している。また、産業場面においても、目標管理 (MBO; management by objects) という動機づけを高める経営マネジメントの手法が開発されている。これは、従業員の一人一人の仕事に関する目標に関して、より動機づけを高めるような目標設定をするように指導し、それら従業員個々の目標を企業全体の目標に収斂していくものである。

目標期待に関する一連の研究によって、目標に対する期待が、道具性期待、遂行期待という2つの要因に分離され、現在の感情や行動が、それらの単独もしくは相互作用的な影響を受けるという結果が見い出されたことは、こうした目標設定に基づいた心理的援助の具体的手続きの開発に示唆を与えるものと考えられる。

引用文献

- Abramson, L.Y., Metalsky, G.I., & Alloy, L.B. 1988 The hopelessness theory of depression: Does the research test the theory? In L.Y. Abramson (Ed.) *Social cognition and clinical psychology: A synthesis*. New York: Guilford.
- Bandura, A. (重久剛訳) 1985 最近のバンデューラ理論. 祐宗省三・原野広太郎・柏木恵子・春木豊 (編) 1985 社会的学習理論の新展開 金子書房.

- Dweck, C.S. 1975 The role of expectations and attributions in the alleviation of learned helplessness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 674-685.
- 板津裕己 1992 生き方の研究 —尺度構成と自己態度との関わりについて—
カウンセリング研究, **25**, 85-93.
- Lens, W. 1986 Future time perspective: A cognitive-motivational concept.
In Brown, D.R., & Veroff, J. (Eds.) *Frontiers of motivational psychology*.
Berlin: Springer-Verlag, 173-190.
- Lewin, K. 1948 *Resolving social conflicts*. New York: Harper.
- Lewin, K. 1951 *Field theory and social science*. New York: Harper (猪股佐
登留訳 社会科学における場の理論 誠信書房).
- 水口禮治 1994 心理学サブノート —自己発見のための診断集— 東京総合心
理研究所 (未公刊).
- 落合良行 1980 孤独感の内包的構造としての時間的展望に関する解析 日本教
育心理学会第22回総会発表論文集, 204-205.
- 大野 久 1984 現代青年の充実感に関する一研究 —現代日本青年の心情モデ
ルについての研究— 教育心理学研究, **32**, 100-109.
- Seligman, M.E.P. 1975 *Helplessness: On depression, development, and death*.
San Francisco: Freeman.
- 杉山 成 1995 青年期における未来展望と適応 —期待理論によるアプローチ
— 立教大学心理学科研究年報, **37**, 65-75.
- 杉山 成 1996 時間的展望の関連要因に関する研究の動向 立教大学心理学科
研究年報, **38**, 65-75.
- 杉山 成 1998 目標に対する期待と心理的適応の関連性 小樽商科大学人文研
究, **95**, 49-63.
- 杉山 成 2002 目標に纏わるストレスへの対処方略 小樽商科大学人文研究,
103, 105-114.
- Van Calster, K.V., Lens, W., & Nuttin, J. 1987 Affective attitude toward the

personal future: Impact on motivation in high school boys. *American Journal of Psychology*, **100**, 1-13.